

ごみ 日和 56

特集：1本のホウキが語りかけること
～シュロ製品専門「内藤商店」を訪ねて～

新連載：ごみ減会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方？」
シミ抜き・染色補正加工の工房「なをし屋」さん

雑記帳：ごみ減の「モノ」語り 踏み台
これっているかしら？ スーパーのポリ袋

ごみ減 活動報告：
ようきにへらそう！キャンペーン in 東山区
京都さくらよさこい
京都サンガF.C.「DO YOU KYOTO? サンガプロジェクト」

地域活動レポート：みんなで手を組み 高瀬川一斉清掃



しゅろのたわし。まるで生きているように肩を寄せ合っている。
太めの針金をよじってあるので「しゅろ」は抜けない。
水を浸けて使えばしゅろが膨らみたがって、なお抜けない。
長寿の秘密。植物の特性をデザインした極み。

写真 藤田 一美（事務局）

「ごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協のお店などで置いて頂いています！
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手を取りあって ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

Q ごみ減

検索

1本のホウキが語りかけること ～シュロ製品専門「内藤商店」を訪ねて～



京都・三条大橋は、江戸時代から東海道の西の起点として賑わい、数多くの歴史の舞台としてその名を刻んでいます。周辺には多くの宿屋が立ち並び、人やもの、そして情報が集まる要所として栄えてきました。その三条大橋の西詰に、今から約200年前（文政元年）、ホウキやタワシなどのシュロ製品を専門に扱う「内藤商店」が誕生しました。厳選された天然素材を用い、一つひとつ職人さんが手作りするホウキやタワシは使い心地が良く、耐久性に優れているため、愛用者は国の内外を問いません。内藤商店のこだわりと、お客さんに愛される理由を、店主の内藤幸子さんにじっくりと伺いました。

お客さんと、職人さんの心を橋渡し

初夏を思わせる強い日差しの中、内藤商店へと一歩足を踏み入ると、さあっと心地よい風が吹き抜けます。じりじりとした暑さも、表通りの喧騒も、



京町家のどっしりとした構えは、一瞬にして私たちが居心地の良い空間へと誘ってくれます。店内には、丁寧に使い込まれた家具や道具が置かれ、とても懐かしい気持ちになります。

「うちは創業当時から看板を出しておりません。良い商品を扱うことで、買ってくくださった方から信頼され、愛される店になる、というのがご先祖さんからの教えです。この信念を代々伝え、お陰さまで現在まで店を続けて参りました。」と内藤さん。控えめな語り口の中に、芯の強さを感じます。店内には数十種類のホウキやタワシが並べられ、その美しさは息を飲むほど。その一つひとつに個性があり、

職人さんの顔が見えてくると言います。

「お客さんはもちろん大事ですけど、職人さんはそれ以上に大事です。だんだんと高齢になり職人さんが居らんようになって、作られなくなった商品も多いんです。ただ、一度は勤めに出た息子さんが、職人の道を選んで親子で作ってくれるのは本当に嬉しいですね。」職人さんの想いを受け止め、それをお客さんに伝えること、これも内藤商店の大きな役割です。更には、お客さんとの会話から新しい商品ニーズを見出し、職人さんと共に商品開発をすることも。暮らしに役立つものをお客さんに届けたい、その熱意は今も多くの方の信頼を集めています。



長く使えるものを身近に

「最近では、京都に住む外国の方も多くお見えになり、日本の文化を積極的に取り入れてくださいます。また、若い世代の方も使い方をよく知っていて嬉しいですね。特に人気なのは、室内用のシュロボウキ。音も出ませんしほこりも立ちにくいので、小さいお子さんがいるご家庭で重宝されているようです。そしてこの小さい方のシュロボウキ

は、お茶やお花のお稽古の際、手元をさっと掃除するのに使い勝手が良いようです。」内藤さんは、一つひとつの商品にまつわるエピソードをお話してくださいます。「このキリワラ形(円筒形)のタワシはどちら側から使っても良いですし、使い込んで先が減ってくるとシュロを束ねている紐をくると外して真ん中を引けば、また新品同様に使えるようになるんですよ。」**シンプルな形の中に、長く使うための智慧が詰まっています。**

「京都はお寺さんが多いですし、染屋さんや悉皆屋^{しっかい}さん、表具屋さんなど、道具にこだわる職人さんも多く、ホウキやタワシ、そしてハケなど、用途に応じて工夫されてきました。」お馴染みの丸いシュロタワシから、シンクの掃除にぴったりの柄の長いタワシや靴磨き用、更にはボディ用まで、その種類の多さには驚かされます。使い方を想像しながら手に取るのも楽しいひと時。手になじむ、懐かしい感覚が広がります。



使ったものへの感謝を込めて

「代々おばあさんが居りましてね、お嫁さんは見よう見まねでいろんなことを教わります。町家での暮らしはもちろん、お店のこと、商品のこと、そしてご先祖さんに感謝する心まで、順繰りに伝えていくんです。」そんな日々の暮らしの中で、本当に大切にすべきことが自然に分かって来るといいます。それを、ホウキやタワシの使い方を通して、若い方にも伝えていきます。どのように使えば長持ちするのか、お手入れはどうしたらいいのか、丁寧に伝えることで、使う人の心まで豊かになります。例えば、シュロボウキは、床や机に真っすぐに立てて、幅が広い面でほこりを払います。机の角や小さい溝でも寝かしたりせず、いつも垂直になるように優しく掃くことがホウキの先を傷め



ないコツです。ホウキに付いたほこりは、紙の上などでざっと払うだけ。ばんばんと叩くと本体の歪みに繋がります。また濡らしたり、洗ったりする必要もありません。「道具へのちょっとした気遣いで、驚くほど長持ちしますよ。」ものを大切に使うことの気持ち良さを、また一つ教わりました。

もの作りの原点に、もっと目を向けて…

「ホウキやタワシには国産の上質なシュロを中心に使っていますが、最近は材料がなかなか手に入らなくなりました。」国内をはじめ、シュロの原産国である中国でも、林業を支える人が激減し、質の良いシュロを手に入れることが難しくなってきたといいます。内藤商店が扱うシュロ製品は、主に和歌山県紀美野町^{きみの}で創られており、実際にその地を訪れて職人さんとの交流も大切にされているそうで



商品をお渡しする時も、ハトロシ紙に包むだけ、余分な包装はしません。

す。彼らの直向^{ひたむ}きな想いや手仕事の素晴らしさは、人々の心を魅了してやみません。作り手と使い手の心を繋げる内藤商店の役割はますます大きくなっています。「もの作りの原点は、素材を育む山を守ること。若い人が、もっと林業や農業に目を向けてくれたら。」と内藤さんは胸の内を語ります。私たちの暮らしを見つめ直すきっかけをくれる、内藤商店の挑戦は続きます。

内藤商店

住所 ▶ 京都府京都市中京区三条大橋西詰北側

電話 ▶ 075-221-3018

営業 ▶ 9:30～19:30

定休 ▶ 年始ほか、不定休



松村香代子（平成25年5月14日取材）

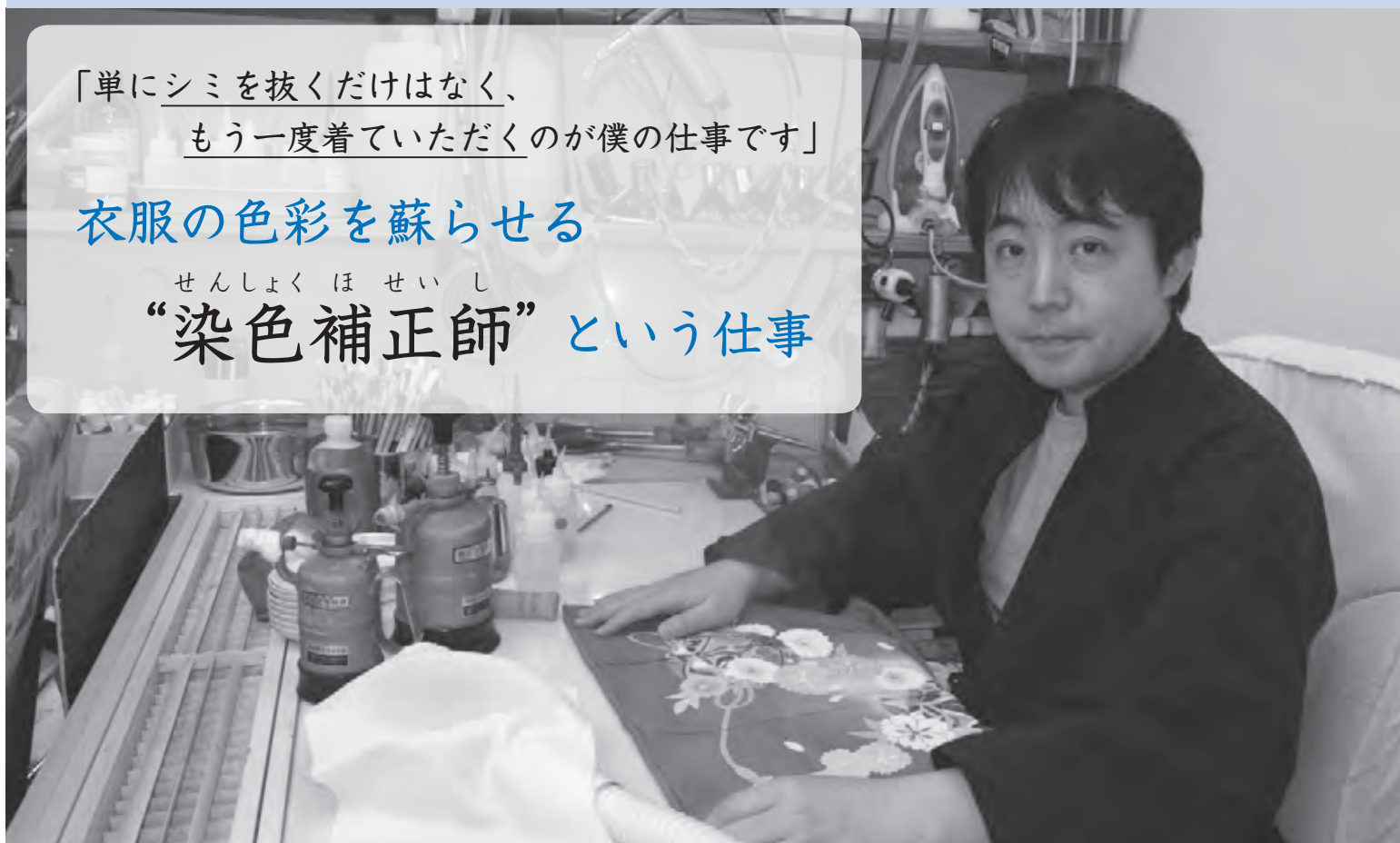


「単にシミを抜くだけではなく、
もう一度着ていただくのが僕の仕事です」

衣服の色彩を蘇らせる

せんしょく ほ せい し

“染色補正師”という仕事



あなたが大事にしている着物に、シミがついてしまったり、色褪せてしまったら、とてもかなしいですね。

それが思い出の品であるならば、なおさらに。

染め織りの技術の粋を集め、衣料としてだけではなく工芸品・美術品としての価値が高い着物が

汚れのせいで捨てられてしまうのは、あまりにももったいない。

そんなとき、思い出とともに色彩を蘇らせてくれるのが「染色補正師」と呼ばれる人々なのです。

高度な技術で衣類の色を再現するプロフェッショナル

「着物は三代」と呼ばれ、親子三代100年に渡って受け継がれる伝統美です。その一端を担っているのが私たちの仕事だと思います」。

そう語るのは染色補正師の栗田裕史さん（43歳）。染色補正師とは変色や褪色、脱色してしまった衣類に高度な修正を施すことによって、限りなく元に近い状態まで戻すスペシャリストのこと。栗田さんは工房「なをし屋」を開業し、呉服だけでなく、洋服やさらには革製品までもシミ抜きや修復を行っています。そしてこの仕事を一般の方へ広く知ってもらべく、新聞や雑誌など各種メディアに登場し、「シミ抜き・着物お手入れの達人」「着物お手入れコンシェルジュ」として活躍され

ています。

さて、染色補正と、よく街場で目にする「クリーニング」との違いはなんなのでしょう？ クリーニングは水や有機溶剤などを使い、洗って汚れを落とします。ですから色褪せや経年による黄ばみまでは修正することができません。また、着物に使われるデリケートな繊維に浸透したシミを抜くことは、洗濯だけでは難しい。染色補正師の元に持ち込まれるものの大部分は、クリーニングで直らない難物。色を抜く、シミを落とすだけではなく、褪せた部分、色が抜けた部分に新たに筆を挿し（これを“色かけ”といいます）、原型に近い鮮やかさを修復します。染色補正はクリーニングと違い、加工を施す仕事なのです。

ベテランの父の元で修業。時には悩んだことも

栗田さんは父・順弘さん（75歳）の跡を継ぐ二代目の染色補正師。着物の街、京都に古くから伝わる染色補正の流派「幾久屋流」の技法を今に伝えていらっしゃいます。染色補正の歴史は長く、およそ300年にも渡るのだそう。天皇家が着用する

染織品の汚れを取り除くつとめを京都の職人に命じたのが事の起こりといわれ、これをきっかけに呉服問屋、和装専門店など業者からの依頼を請けるようになりました。そうして京都で生まれた技法が代々継承されてゆくうち、繊維製品の発達、染料

第一回 シミ抜き・染色補正加工の工房『なをし屋』さん

などの進歩とともにさらに研ぎ澄まされ、今日に至ります。このように染色補正師は京都のみならず我が国のファッション、アートの世界を縁の下で支える重要なお仕事です。

栗田さんはそんな重責を担うお父さんの背中を見て育ちました。そしていったんは神戸の高級洋菓子製造会社に入社し、店長候補として百貨店のショッパに勤務していたものの、やはり自分は手仕事の分野で生きていきたいと考え、跡を継ぐ決意をしました。そうしてお父さんに弟子入りをし、修業を積むことになるのですが……。

「父は50年以上この道ひと筋という大ベテランの職人。『見て覚えろ』という世界の人で、手取り足取り教えてくれるとい

うことはありません。思いどおりに仕上がらず、『自分はむいてないのかな』と悩んだ時期もありましたね」

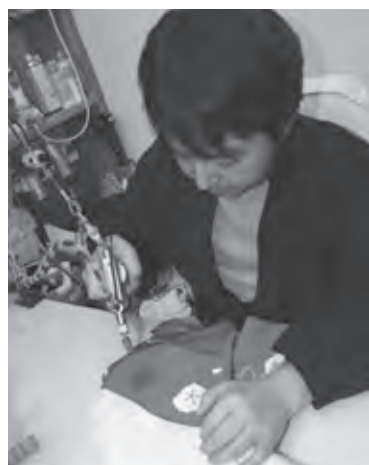
そんな栗田さんが「自分が一人前になった」と感じたのは？「実は最近になってからなんです。ある日、父が急病にかかり半年間入院することになったんです。それまで父とふたりで分けてやっていた仕事を、ひとりでこなさなくてはならなくなりました。不安でしたが、なんとか店をつぶすことなく、退院した父を迎えることができた。その時、『ああ、できるようになったな』と感じました。**悩みながらも毎日こつこつやってきたことは、自分を裏切らないんですね。**シミ抜き・染色補正の仕事の面白さが、改めてわかりました」。

“職人らしくない職人”だからこそ生まれた発想

染色補正師の仕事は発祥から今日に至るまでの永きに渡り、基本的に和装関連企業から預かった品を修復するという構造でなっています。京都の工芸の世界は分業が当たり前であり、お客さんからの注文を受けつける仕事と、それを修復加工する下請けに分かれていました。職人が一般の方と直接やりとりすることは、珍しかったのです。栗田さんが旧来の常識を覆し、お客さんと向き合っただけのカウンセリングから検品テスト、見積もり、染色補正作業、お渡しの際の経過説明まで、同じ職人が一貫して行う「なをし屋」を開業したのが2007年。およそ300年にも及ぶ京都の染色補正の歴史において、これは希少な出来事でした。

「うちのように同じ職人が、ひとりのお客様につききりになるという店は少ないですね。本流ではないし、そのため異端視されることはありますよ。でもこの仕事をしてゆくうちに、世の中には、思い出の着物が汚れたり、色褪せたりして困っ

ている人がたくさんいるんだということを知ったんです。職人が直接お客様の相談に乗れたら、一番いい方法が見つかるじゃないですか。実際、いろんなところで断られた品が、うちで修復できたということもあります。また、なかにはさすがにうちでも無理というものもあるのですが、その際は『別の色に染めてみてはいかが？』とアドバイスすることもできる。単にシミを抜くのではなく、もう一度、着てもらえる方法を示唆するのが、僕の仕事なんです」



色だけではなく大切な思い出も蘇らせる仕事

自らを“職人らしくない職人”と語る栗田さんの柔軟な発想から生まれた「なをし屋」。ここにはお客様から衣料品だけではなく、大切な思い出も持ちこまれます。

「結婚式場で赤ワインを浴びせられ、着物がワインまみれになってしまったお客さんがいたんです。その着物は、お父さんが自分のために仕立ててくれた大切なものだったのですが、どこの業者からも『これはもう直らない』と断られたそうです。それで最後にうちにまわってきました。赤ワインの汚れが広範囲に渡っていたので長い時間がかかりましたが、修復しました。これは喜んでもらえましたね。このようにお客様の大事な記憶も預かるので責任は重大ですが、喜んでくださったときは僕も嬉しいし、この仕事をやっていてよかったと思います。時には丁寧なお礼状をいただいたときもあるんです。誰かが喜んでくれると思うと、モチベーションがあがりますね」

7月4日の「**なをし**の日」に生まれた栗田さん。捨てられたかもしれない運命にあった着物に、今日もこうして新たな命を吹き込んでいます。噂が噂を呼び、今や京都に限らず全国から依頼があるとのこと。染色補正は単なる「リユース」にはとどまらず、その着物が生まれた歴史と、そこにかかわった人々に想いをはせる「リメンバー」を担う仕事なのでしょう。

なをし屋 京都市中京区壬生西松町16番地 7

電話：075-204-7738 E-mail：info@naoshiya-kyoto.com

営業時間：11：00～18：00 日曜・祝日（臨時休業あり）定休

http://naoshiya-kyoto.com/

吉村智樹（平成25年5月16日取材）

会員さん募集！ あなたもごみ減の会員になりませんか？

京都市ごみ減量推進会議は、つながりや創意から生まれる様々な活動を展開することにより、ごみを減らし、環境を大切にしたいまちと、暮らしの実現を目指しています。市民、事業者、行政で取り組み、きっとできる！当会議では、ともに活動する会員を募っています。詳細は、事務局へ問い合わせください。TEL:075-647-3444

昔の生活は、おのずと持続可能なものでした。昔の道具（モノ）を通じて「その道具を取り囲む昔の人々の暮らし方を今に生かせないか」を考えるコラムです。

踏み台

思いがけず出会ってしまった。「踏み台」のことである。

今回のこごみ日和56号の取材でお伺いしたホーキ、タワシ、刷り毛、ブラシ、マットなどを扱う内藤商店さんの店の中で人知れず、それはあった。

店主、内藤幸子さんの腰かけとして再び役割を得た踏み台は居心地よさそうに店の空間に陣取っていた。「これ、踏み台やけど座るのにちょうどええんですわ。」内藤さんが屈託なく笑う。小さな踏み台にちょこんと内藤さんが腰かけていると店内に打ち解けた雰囲気、客と店主の距離を縮める。まさにええ按配である。

この踏み台、京の町家暮らしにはつきものだった。不思議なことにどの家にもあったと言っているほど一般的な道具だった。これは知り合いに問い合わせたことだがこの踏み台、どうも買った記憶が無いという返事が返ってきた。道具学、住まい学を専門にしておられる山口昌伴さんによると、どうやら大工の置き土産だったらしい。それ



も若手の大工見習いの卒業制作として作らせてみたものというコメントをしておられる。



この踏み台、釘1本使わず、木組みで作られている。

さて、踏み台は神棚の掃除やすす払い、そして神さんへのお供物をそなえるのに重宝した。それだけではない。昔は柱時計のねじ巻きにもちょっと背伸びしても手が届かず、この踏み台が用いられた。ねじ巻きは子どもの役割。そこ子どもも家の中での自分の役割があることを自負して手を抜かなかった。そんな習慣が後になって子どもの仕事への興味を沸かせることになったのではないかな。実はこの踏み台には何故か穴があいている。子どもはちゃっかりこの穴に自分のおもちゃを入れて大切に仕舞っておいたものだ。

この穴の形状が内藤商店さんのものには扇型に開けられていた。ほとんどは丸である。

戦後、高度成長時代を迎えて住宅は近代化し、それと共にこの踏み台も姿を消した。同時に神さんも家の中から出ていった。これは進歩なのか、それとも退歩したのか、そこを考えて見るのが今、問われている。

買って捨てる世の中でこの踏み台はどっかと腰を据えて内藤商店の主人の居心地を守っている。

最低でも自分の生涯と同じだけ生きてくれる道具を持ちたい。そんな衝動にかられる瞬間であった。

大橋正明（こごみ日和編集長）

これって、いかに？

第1回 スーパーのポリ袋

このコーナーでは、暮らしの中にある「なんとなく使っているけど、本当にいるのかなあ？」というものに注目して「これをやめれば、ごみも減るよね」というものを紹介していきます。

ちょくちょくとスーパーで買い物をするのですが、レジをするときに、商品をポリ袋に入れてくれることがあります。豆腐や漬物、お肉やお魚、惣菜や、はだかで売っている野菜なんかを、いつもではないのですが、レジの人が、手早くシャカシャカの袋に入れてくれるアレです。

確かに汁気の多い漬物や生魚などは、袋やトレーの中の水がもれることもあります。お肉って、お肉の下に敷いてある水気を吸うシートのおかげもあってか、中の汁はもれないですね？実は、私はもれたことがありません。あと、豆腐も最近はぴったりフタをしてあるので、開くこともないです。みなさん、少なくとも豆腐やお肉は、無意識にポリ袋をかぶせずに、ことわったり、自分でも使わないようにしてみませんか？それだけでも、みんなでやると、結構な量のごみ減量につながります。では、また次回！



▲スーパーから家までの短い時間のためだけに使われるポリ袋

齋藤友宣（事務局）

ようきにへらそう！キャンペーン in 東山区

3月8日(金)～3月27日(水)

スーパーマーケットで買う野菜や肉・魚には、たくさんのトレーや袋などの容器や包装がいっしょに付いてきます。発泡トレーやポリ袋など、容器や包装は、中身の商品を保護するという大切な役割を担っていますが、まだまだ減らせる部分があるのではないかと、ただ、買い物する側の市民だけで、取り組める部分には限りがあります。

今回、京都市ごみ減量推進会議と東山区地域ごみ減量推進会議、東山区のスーパー2店舗（大国屋今熊野店・ハッピー六原）などと一緒に、スーパーでの買い物からごみを減らす取組「ようきにへらそう！キャンペーンin東山区」を開催しました。

揚げ物バイキングをトレーではなく、ポリ袋を使うようアピールしたり、ごみの量が多くなる「透明プラのふた」を使用しないようにしたりと、地域とスーパーが一緒になり様々

な「ごみを減らす売り方・買い方」を展開！

あわせて、麺料理研究家の小紺有花さんを招いて「塩麺料理教室」を開催し、その中で、容器や包装ごみについて、より深く知っていただくための講座も開催しました。



京都さくらよさこい

梅小路公園

4月6日(土)・7日(日)

「啓発イベント小委員会」で展開している、イベント等での環境啓発ブースの出展。今年度も「京都市ごみ減量めぐるくん推進友の会」と一緒に展開していきます。

今年度、一発目は「京都さくらよさこい」。風雨の中で開催でしたが、演者の応援に来られた方をはじめ、京都水族館・梅小路公園手づくり市などに来た方が、わざわざ傘を閉じて、ブースに寄ってくださいました。

エコクイズの内容は、2R（リユース、リデュース）の大切さをお伝えすることと、お直し屋さん紹介サイト「もっぺん」や、学乳パックリサイクルトイレットペーパー「めぐレット」のPRを兼ねた内容で、「今度使ってみるわ！」と嬉しい声をいただきました。



京都サンガ F.C. ホームゲームでの、 「DO YOU KYOTO? サンガプロジェクト」

西京極総合運動公園内

5月12日(日)

夏のような日差しの中、ザスパクサツ群馬戦を観戦にこられた熱いサポーターさんに、ごみ減量をPR。ご家族連れをはじめ、老若男女たくさんの方に、エコクイズに挑戦いただきました。クイズに参加いただいた方に、今回の展示が役立ったかどうかを聞き、「役だったよ」にたくさんの〇をいただきました。



機密文書も、大切な資源です！

事業所等で出る、機密書類や個人情報が含まれた書類を、焼却していませんか？「秘密書類リサイクル事業」を利用すれば、情報を保護しつつ、資源としてリサイクルできます。詳しくは、**事務局 075-647-3444**（担当 藤田）までお問合せください。

地域活動レポート

みんなで手を組み 高瀬川一斉清掃

はじめてのパートナーシップで 二条から七条まで

2013年4月14日（土）は、高瀬川の未来にとって記念すべき日になるのかもしれない。午前9時から11時までの2時間、一之舟入のある二条から七条小橋まで、清掃が実施されたのである。ただの清掃ではない。参加者は約170名。火バサミを持ち、川岸のごみや落ち葉を拾う人、長靴を履き川中へ入り、缶や木片を引き上げる人…。銅駝高瀬川保勝会、立誠高瀬川保勝会、永松高瀬川保勝会、菊浜高瀬川保勝会の4保勝会と地域の6団体が手を組み、そこへ市民団体も加わり、周辺の企業数社が呼応し、社員が出向いた。京都

市はごみ袋を提供し、拠点に集まったごみの回収を受け持った。同日・同時に、市民、事業者、行政が協働で取組んだのだ。前年、「秋の

舟まつり」や落葉の堆肥化などで銅駝保勝会との協働の実績を積んだ京都市ごみ減量推進会議は、高瀬川一斉清掃に関わる市民、事業者、行政の橋渡し役として事業を支援した。それまで各保勝会や地元の団体ではそれぞれに清掃を行っていたが、一斉での清掃ははじめてのことだった。



木屋町御池の川辺りに設置された落葉の腐葉土化の袋。

歴史ある地だからこそその誇りと務め

高瀬川は、言わずと知れた歴史的景勝地。坂本龍馬寓居



川の中を清掃する菊浜の地域の方

跡、土佐藩邸跡もあり、幕末の歴史舞台としてあまりにも有名だ。江戸時代初期1611年（慶長16年）高瀬川は角倉了以・素庵親子によって開削され、3年後の1614年（慶長19年）二条より伏見まで竣工なった運河である。京都の中心部と伏見を結ぶ重要な物流ラインとなり、1920年（大正9年）、役割を終えるまで、物流や移動の運行路として栄えた。伏見から淀川を経て大阪、さらには西国航路につながる交通の要であった。

大正の頃から、地域で組織を作り、景観保存、観光やまちの活性化を掲げ、啓発や清掃活動に取り組むなどしてきた。高瀬川沿いに住み、また事業を営む人々は、景勝地としての誇りを持ち日々を営んでいる。

次世代につなげるために 環境にやさしいまちを目指して

しかし、時代の波は高瀬川にも押し寄せ、さまざまな問題が生じる。移り行く時代の中で「まち」のかたちを維持し、活力を得るためには、かなりの力が必要になってくる。高瀬川に関わる皆で力を合わせ活動しよう、そこを出発点に問題点・反省点を共有し、次の展開につなげよう…。そんな想いが結実し、今回の一斉清掃が行われたのである。「資源循環させ、環境にやさしいまちづくりをすることが、世界各地から訪れる観光客へのもてなしになる」と、清掃活動に参加した中山義也さんは語る。

一年後の2014年（平成26年）は、高瀬川開削400周年。歴史を祝福する事業が数々行われることだろう。今回の一斉清掃のように、皆が手を携え取り組むことが、未来を切り拓く原動力となるにちがいない。



森田知都子（平成25年4月14日取材）